[ご挨拶] 2017/12/17 於：大東文化会館

戦時日本語教育史研究会のめざすもの
――シンポジウムを開催するにあたって――

田中 寛
戦時日本語教育研究会
The Japanese Language Education Wartime History Society

==========

１．日本語教育史にみる歴史と人間

日本語教育史という学問・研究領域は単に日本語教育の歴史を通観するだけの作業ではなく、日本語教育をとり巻くさまざまな人の往来、交流、また言語接触の姿態を歴史的な視点から描きだす作業である。本研究会は、その通時的な期間を戦時という時間に限定し、焦点を当てて再考するものである。ここで言う戦時とは 1931 年の満洲事変（918 事変、柳条湖事変）から太平洋戦争終結にいたるアジア太平洋 15 年戦争をさす。とりわけ日中戦争勃発の 1937 年から太平洋戦争終結の 1945 年まで(中国では「抗戦 8 年」)を視野に置く。

その前になぜ戦時、戦時期に焦点を当てるのかを説明しておかなければならない。

周知のように日本語教育史にはさまざまな学際的な領域を視野におきつつ、多彩な取り組みが指向されている。よってその出発の動機、研究者の関心、認識過程、研究姿勢によって対象も方法もさまざまであろう。具体的には日本語教育史研究会の会員の研究履歴をみてみるとその諸像が浮かび上がってくる。

たとえば近代以前、西洋人の日本語観、日本語研究、日本観なるものを対象にする研究者がいる。国語史、国語学史的な領域でもあるが、いわば教養的、高踏的な関心があり、日本語教育という比重はそれほど大きくはない。また、中国清末の日本留学生にまつわる日本語教育、日本語学習の実態を研究対象とするケースもある。これには人的交流や使用された教科書教材、教授法なども復刻や考察の対象となる。ここから嘉納治五郎や松下大三郎、松本亀次郎など、中国留学生日本語教育に大きな影響を与えた足跡なども研究考察の対象となろう。台湾、朝鮮に目を転ずれば、日本語教育の諸相をめぐるさまざまな検証や考察が積み重ねられている。伊澤修二、山口喜一郎などの日本語教育観、教授法についても早くから注目されてきたが、より一層の研究も期待される。

これに次いで戦前戦中の日本語教育史である。本研究会が重点をおく領域である。アジア、とくに中国、東南アジア、朝鮮、台湾、旧南洋群島における日本語教育の実態の検証である。この研究領域については、日タイ言語文化研究会がタイとの言語接触と摩擦という視点から多くの資料を発掘し、発信していることは特筆するに値する。とくに戦前・戦中のタイ・バンコクにおける日本語教育に深く携わった星田晋五の資料が近年新たに発見

され、それらの綿密な考証が期待されている。一方、地域によってはほとんど手つかずのところもある。さらに戦後の日本語教育の出発、諸団体の誕生と発展、たとえば海外技術研修生・留学生の受け入れ、これに伴う日本語教科書開発の考察などが続く。

これに戦前戦中の日本語教科書の復刻とそれにともなう日本語教科書観、現代の教材教科書との比較研究が加わってくる。教科書に収録された題材、語彙、表現、文法などからも当時の異文化接触の実像、教育指導状況の内実が浮かび上がってくる。南米、ミクロネシア、台湾、ハワイといった各地に残存する日本語の語彙調査も日本語教科書の復刻整備とともに近年進められてきた。こうしてみると、どこからどこまでを日本語教育史研究の対象とするのか、いささか戸惑いも否めないのだが、それらほぼすべての課題を内包した対象として、言語教育が最も鮮烈に出現した戦時期に焦点を当てることは間違った方向ではないだろう。それは科学技術や現代医学の発展が軍事技術、軍事医学に大きな影響をうけてきたように、語学教育・研究も戦時下においても例外ではなく多大な影響をもたらさざるを得なかったからである。

２．日本語教育史研究の指向性

時代を大きく戦前・戦中と戦後で区切れば、後者においては中村重穂氏の日本語教育研究文献目録に「書籍篇」「論文編」として通時的整理が施され、研究に供していることは研究者間でよく知られている。しかし、戦前・戦中の夥しい文献・論文については未収録であり、『戦時期における日本語・日本語教育論の諸相』〈田中寛、2015〉の巻末で試みているのが現在最も詳細な記録ということになる。戦前・戦中という期間では日本語教育振興会から月刊誌『日本語』が刊行されたこともあり、現在に連続する視点が少なからず含まれている。一方、点在する資料を一か所にまとめて参照することが不便なことから、この時期の主要論文、論説を分野項目別に電子データ化、詳細な年表作成が求められる。一方、これにともない、あるいは両輪としての外国語研究の実態も、たとえば〈大東亜語学〉として日本語教育の発展と両輪の関係で取り組まれた当時の東南アジア語学、中国語学（支那語学）の研究も当然取り組むべき作業として考える必要がある。現在声高らかに言われる「多文化共生」社会、グローバル化といった潮流は、過去においては現在以上に多方面で展開された時代があったことを想起しなければならない。

以上の時間的領域、空間的領域を考えれば、欧州、アジア、北米南米、豪州といったさまざまな地域での日本語教育の創成・発展の歴史の検証が取り組まれるだろう。欧州でも英国など個別な国単位での日本語教育史の研究も取り組まれている。くわえて支配者・施政者側、教師側からだけではなく、学習者、民衆の視点から描く努力も求められている。満洲国、ハワイなどの日本人が多く入植したところでは多くの日本語教科書も作られ、さまざまな教育が見られた。このようにざっと俯瞰してもマクロとミクロの視点から考察する困難さがつきまとう。全体を見渡す日本語教育史の手軽な入門書のようなものがいまだに組まれていないのはこうした背景もあるように思われる。

日本語教育という活動、事業、工作は一般に外国語教育がそうであるように、言語教育を通して意思伝達を可能にさせ、新しい文化（異文化）の理解をうながすものだが、そこには当然ながら母語との確執が介在する。普及から定着へはさまざまな障害が介生まれる。母語という主体的、主観的な言語観から、主体を対象化、客体化し、母語の視点にはない視座を建設する。そこには当然ながら主体の自己成長という課題もともなうことになる。教師と学習者のアイデンティティを志向する、しかも自他共有の建設は、戦時期にはさまざまな擬態をもって推移することとなった。まず教師側の問題である。これにはさまざまな養成の課題がある。母語教員、現地教員に対する具体的には教授法の教授である。さまざまな方言、母語背景をもつ教師の養成は、一朝一夕にはなされない。かつての満洲国における日本語教員養成などに見られるように外国人日本語話者を日本語教員として養成する際にも、さまざまな困難がつきまとう。研修を目的とした日本留学の実態についても不明な点が多いように思われる。

次に教師が用いる教科書、教材の性格である。日本語の体系的な整理がまだ不十分な状況下ではさまざまな実験的な教材、教科書の編集が行われたことは想像に難くない。あわせてそれを用いる側の教員の資質の問題が介在した。教科書教材の編集、流通・配給体制の問題とも相まって、地域性を浮き彫りにし、さまざまな障碍を浮き彫りにした。一時的には「百花繚乱」、「百花斉放」の偽証的状況を生み出したが、「燎原の火」のごとく沸き立ったブームを継続させることにはつながらなかった。

最後に、もっとも重要な要素は学習者という対象である。子ども、青少年を対象にするのか、成人を対象とするのか。またあらゆる職業に従事する者がいると想定して、その平均的な授業項目をどのように策定するのか、といった問題は国内においてさえ不十分であったことを考えれば、まさに試行錯誤的な実験を必要とした。そして、これにともなう教室、教場などの施設の問題である。必ずしも十分ではない立地条件と、とくに戦局によっては難民があふれる状況の中では教育そのものの形態が擬態化せざるをえない。

こうして、戦争という特殊状況の中で、日本語教育がどのように推移したのかを探る試みは自ずと研究者側に学際的な関心と尖鋭な指向性が要請されることは明らかであるし、またその方法論をめぐっても、十分に議論を重ねていく必要がある。

３．シンポジウム開催の趣旨

ここで、今回のシンポジウムについて開催趣旨を述べておくことにする。

日中戦争が勃発すると、日本人の進出はいたるところに展開され、日本人の経済活動にとって日本語の普及が重要な意味を帯びてくる。日本人の行くところに日本語が扶植・普及され、音楽などをはじめ多様な植民地文化が花開くようになっていく。一方、国内にあっては『支那語雑誌』の創刊など中国語ブームも湧き立つようになる。学習者のための『日語指南』、『南方語雑誌』なども創刊された。各地に「日本色」、「日本化」がすすみ、さまざまな言語文化接触が繰り広げられる。侵略戦争にともなう民衆間の広範な言語文化接触

の現象は今日でいうところの＜言語景観＞学にも連なるもので、観光ツーリズムの研究等もふくめ、多様な考察、検証の対象となろう。

文部省図書局『週報』（昭和 15 年 5 月）に掲載された論考「日本語の大陸進出」は戦争という未曾有の体験によって直面した国語政策が明確に述べられている点で重要である。これを機にさまざまな日本語論が沸騰した。日本語教育論、教科書教材論、また今日言うところの異文化理解まで含め、近代日本語が近代国家建設の基盤としてようやく形成された国語が、戦時国際語としての日本語に脱皮し解き放たれたのである。そこに大いなる齟齬（国内国語と国外日本語との認識の乖離）が生まれたのは当然のことであった。航空機の発達にたとえていえば、それまでやっと国内の短い路線を飛んでいたものが、航続距離を伸ばし、国際線となり、長途渡洋飛行を可能にした。そして人、物を運ぶだけでなく、世界を発見し、新しい文物を取り入れるのに役立った一方、爆弾を搭載し、非人道的な爆撃を敢行したように、日本語もまた市井の、民衆の交流から国策として強制する日本語教育、皇民化教育とも不可分の関係を潜在、顕在させつつ、国内においては国民統合のための国語整備・統制、海外にあっては大東亜共栄圏下の日本語の対外普及工作に変貌することとなった。人心掌握のための戦略的手段としての重要な使命を帯びていったのである。

本シンポジウムでは５人の発表者がそれぞれの視点から、日中戦争期に日本語教育がどのような戦略的な役割を行ったかを検証している。そこからこれまで分散的かつ不透明であった日本語の教育、普及の実態が浮き彫りにされて来るだろう。また、日本語教育史の観点から日中戦争の新たな側面に光が当てられることを期待したい。

ここ数年、刊行の続いている朝日新聞外地版（北支、中支、台湾、朝鮮、満洲）*には国内版には見られない当地の実態が紹介されている。その中には日本語の普及、教育関連の記事が少なからず掲載されている。朝日新聞に次いで毎日新聞外地版*の刊行も始まり、今後はこうした一次資料をふまえた研究も盛んになっていくことが期待される。新聞は情報の宝庫であり、研究書籍の隙間、背景となる事象がちりばめられている。日本語がいかなる姿態、擬態で民衆のなかにわけいり、浸透していったのか。その実態を探ってみたい。

たとえば当時の新聞に次のような見出しの記事がある。（*いずれも、ゆまに書房刊）

支那側学校で日語を正科に　1938．2.1　北支版
南支に日本語の進軍　1938．11.3　中支版
全北支の学校で日本語を正科に　1939．1.5　北支版
日本語、北支に氾濫、白熱化する普及工作　1939．3.21　北支版
北支全線を日本語化　速成読本を支那従業員に配布　1939．1.22　中支版

また、盧溝橋事件勃発後には、『出版通信』（『出版同盟新聞』）にも以下のような記事が掲載されており、当時の日本語の「進出」についての実態が浮き彫りにされた。

景気は北支より　日本語熱の勃興で　北平市中に会話本払底　341 号　1937.10.5
北京大学は九月開校　師範は日本語を正科に　361 号　1938.5.5
月刊『日語指南』蛍雪書院創刊　836 号　1941.6.8
南方へ南方へ　日本文化の南方進出に就いて　926 号　1942.2.3
同盟論壇　共栄圏確立と日本語　933 号　1942.2.22
文部当局が計画する南方向け日本語教科書　同上
南方文化工作に「日本語早り」944 号　1942.3.24
日本語普及案決定　南方向教科書編纂　発行会社はどこか　1003 号　1942.8.20

こうした記事の検証から、日本語が工作、普及の様々な浸透とともに言語侵略の姿態・擬態があらためて浮き彫りにされていくのではないだろうか。日本語という言語が戦時体制下においてさまざまな形象、紆余曲折の経緯で記憶を遺していったことに想像力を働かせる必要があるのではないか。それはまた言語が戦争に深く加担していく過程を検証する作業でもあり、日本語教育学が真に平和学構築の一支柱となるための必須条件でもあろう。中国大陸における日本語教育の実態は 1942 年から 45 年にかけ華北日本語研究所で刊行された雑誌「華北日本語」（冬至書房復刻 2009）に収録された記事群によって凡その傾向を知ることが出来るものの、地域的な偏りは否めず、末端の日本語浸透の実態までは把握できない。草の根の実態は丹念な一次資料の発掘に俟つほかはない。私たちは歴史修正主義を強く拒むものである。この研究営為は日本語教育史の空白を埋めると同時に、実証的な事実検証によって日中の未決の歴史認識の溝を埋めあわせるためにも重要な作業である。

４．ふたたび民衆側の歴史として

戦時日本語教育史研究会の第 1 回シンポジウムを「日本語教育史から見た日中戦争」としたのは、今年 2017 年が日中戦争勃発から 80 年をかぞえる節目の年であること、一方、こうした時機に当たって学術諸団体、研究会やこれらの会に属する研究・教育者からは上記に記したような観点からの取り組みがほとんど問題提起されないことへの疑問から出発している。こうした作業は二国間の信頼を再構築するためばかりでなく、今後の日本語教育史研究の可能性を模索することでもある。歴史を追認・検証すると同時に、言語政策、国語問題が戦争遂行のための重要な施策として陶冶されていく過程を、言語研究者、言語教育者の大いなる陥穽ともいうべき視点から検証するものであり、同時に歴史を背景とした語学教育、外国語教育のもうひとつの意味をあきらかにするものである。

私は多くの日本語教育にかかわる教師が、こうした視点に関心を払おうとしないことを残念に思う一人である。日本語学、日本語教育学を主専攻、副専攻とする大学の履修課程においても日本語教育史を重視する教員は極めて稀少である。こうした歴史に関心を払うことのない教学体系のなかで日本語教育学を履修した学生が速成日本語教員として巣立って行く現実は、かつての短期日本語教員養成の時代とどこが異なるのだろうか。

ただ、スキルとしての日本語の教授法を習得し、語学教師、語学教員として言語普及に携わる人々の中には、こうした歴史像への関心は、そこに生じる異文化接触のさまざまな問題提起を回避する以前に、余りにも希薄であるように思われてならない。言語を扶植する、教授することの先に、学習者と教授側にどのような個人史的な世界が拓けるのかを想像しつづける。この資質の要請こそが求められるのではないか。そのためには、共時的視点と同時に通時的な視点が欠かせないことは論を俟たない。

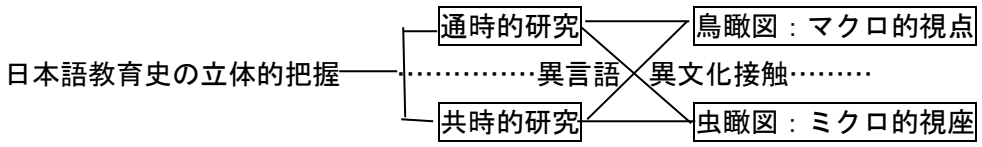

図　人文科学研究における日本語教育史研究の立ち位置

以上が、私のこれまでの四十年余の日本語教育で培ってきた体験的認識論であり、新しい人文学研究の学際的取り組みの見取り図でもある。

５．今後の展望

かつて、「早わかり」という教科書名称が流行した時期があった。いわく、「支那語早わかり」、「日語早わかり」、「大東亜共栄圏語早わかり」などなど。「早わかり」の功罪は現在も受け継がれている。そして、いま世界で最も広く使われている日本語教科書として「みんなの日本語」がある。書店にうずたかく積まれている光景を見るたびに、あの日本語の世界的進出（石黒修）――過去の声高に叫ばれた時代が重なってくる。歴史的思考の軸足をもち、「日語早わかり」から「みんなの日本語」にいたる過程を再検証していくことによってこそ、真に「みんなの」と大手を振って言えるのではないか。

私たちは従来の日本語教育史研究の枠内にとどまることなく、同時に拠点・教理主義的な歴史研究から解放され、静態的よりは動態的に、周縁、周辺的な要素を見渡し、＜鳥瞰図＞的なマクロな視点と＜虫瞰図＞的なミクロな視座という＜複眼＞的な手法によって、日本語教育史を立体的、かつ統合的な人間の営みの中に描きだすことを心がけたい。**図**に示したパラダイムは、国内外の多くの叡智の結集と対話によってこそ可能になる。

戦時日本語教育史研究会は中国をはじめ、アジアにおける日本語普及策、言語政策の要諦の展開に軸足を置きつつも、ひろく同時代の諸地域において展開されたさまざまな日本語教育の実態、教科書作成の過程などと取り上げていく必要がある。活発な議論を通して、また内外の研究者との交流を通じて、何よりも「人間が見えてくる学問研究」でありたいと願っている。また、以上述べた趣旨を次世代の若い研究者にも継承していくべく努力していきたい。そのためにも諸賢のご理解、ご協力、ご協働をお願いする次第である。

2017.9.18.　アジア太平洋 15 年戦争の勃発日に

基調講演・研究発表：タイムスケジュールと要旨

【基調講演】ではシンポジウムの内容を全体的に見通すべく、二名の講演者により、問題提起を行う。また、**【研究発表】**では中国大陸、台湾、満洲国にわたってどのような日本語教育の形態が推移したのかを多方面からさぐっていく。

【基調講演】⑴10:50-11:30
■宮脇弘幸（元宮城学院女子大学教授）
「政治とことば―旧日本植民地・占領地に発現した文化・言語・心理現象―」
【要旨】
戦時下、植民地、占領地には日本人の「進出」によってさまざまな言語文化接触の時空間が出現し、それにともない日常の暮らし、社会にも多くの新しい言語、心理感情の異形態が流布した。そこには民衆の感情が言語化されない種々の現象も観察された。本発表では日本語によって、民心掌握のための粉飾された日常的姿態を素描する。

【基調講演】⑵11:30-12:10
■劉建輝（国際日本文化研究センター教授）
「隠蔽と顕現―従軍画家が描いたもうひとつの日中戦争―」
【要旨】
従軍作家とともに戦場に送られた従軍画家は、戦線の情景を記録すべく、民衆の生態を描きつづけたが、その画布が語る真実は、画家たちの関心とともに表現者にとっては賛美と隠蔽の工作も周到に仕組まれていった。対象となった画題などにその観察の真実をさぐり、日中戦争の記憶の一端を浮き彫りにする。

以上、司会：酒井順一郎（九州産業大学）

……

研究発表⑴ 13:00-13:40
■「朝日新聞外地版（北支・中支）にみる日本語普及工作」　田中寛（大東文化大学）
【要旨】軍主導による宣撫工作の一環としての日本語普及、民間日本語学校の開設など多岐にわたる日本語の進出形態、日本人の進出による地域の日本化、日本色の実態を、朝日新聞外地版新聞記事にさぐる。言語普及という活動がどのような経路で浸透し、民心掌握を目指していったのか、その生態と擬態を末端の記事をふくめ瞥見する。また、宣撫をテーマにした文学、小説、報道文学にどのように現れたかを考察しつつ、戦時下における言語接触の持つ意味を考える。

研究発表⑵ 13:40-14:20
■ 「華中占領地の日本語―『大陸新報』を手掛かりに」　関智英（日本学術振興会特別研究員）
【要旨】1937 年から 1945 年の 8 年間にわたり上海・南京を中心とする華中地域は日本の占領下に置かれた。ただその間には日本の樹立した現地政権の変遷や日本の対米英宣戦布告など、いくつかの画期があり、占領下の社会状況は一様ではない。本報告では、そうした占領地の変化に留意しながら、1939 年から 1945 年まで上海で発行されていた日本語新聞『大陸新報』を手掛かりに、日本語に関連して如何なる問題が提供され、それが如何に議論されたのかを検討する。

研究発表⑶ 14:20-15:00
■「戦場における日本語教育と文化交流―八路軍を中心に」　酒井順一郎（九州産業大学）
【要旨】日本軍の日本語工作と日本側に対峙する敵側であった中国側の日本語教育はどのように推移したのか。八路軍における教習の特徴、使用教材を検証し、そこに言語交流に知られざる姿態を明らかにする。
また、教習のなかで日本人教師の果たした役割についてもふれたい。

以上、司会：藤森智子（調布学園短期大学）

……休憩：15:00-15:20……

研究発表⑷ 15:20-16:00
■ 「日中戦争期台湾における日本語普及」
藤森智子（田園調布学園大学）
【要旨】日本統治下の台湾では、学校教育のほかに社会教育によっても日本語教育が推進された。特に 1930 年代からは、「国語講習所」という学校に通わない多くの台湾人に対する日本語普及施設が各地に設置され、日本語を中心とした教育が行われた。台湾における日本語普及率は「国語講習所」設置後、飛躍的に上昇していき、「日本語普及網」が台湾社会に張り巡らされた。社会教育を中心とした日中戦争期の日本語普及の実態を明らかにする

研究発表⑸ 16:00-16:40
■ 「「満洲国」における日本語教員養成」
祝利（九州大学）
【要旨】満洲国成立後、満洲国の建国精神を理解する教員の養成が喫緊な課題となった。本研究では、満洲国の教員養成の 4 つの柱、すなわち中堅教員の再教育、教員留学生の派遣、一般教員の検定、新教員の養成、特に中国人日本語教員の養成についての分析を通して、満洲国における教員養成の体系がいかに再構築されていったかを検証し、満洲国の教員養成の特徴を明らかにする。

以上、司会：田中寛（大東文化大学）

討論：16:40-17:20
司会：酒井順一郎（九州産業大学）